

高校生における性格特性のDark Triadと 援助要請態度との関連

阿 部 晋 吾 関西大学社会学部

太 田 仁 奈良大学社会学部

福 井 斉 梅花女子大学心理こども学部

The relationship between the Dark Triad traits and help-seeking attitude in high school students

Shingo ABE (Faculty of Sociology, Kansai University)

Jin OTA (Faculty of Sociology, Nara University)

Hitoshi FUKUI (Faculty of Psychology and Children's Studies,
Baika Women's University)

Participants in previous studies on the Dark Triad of personality (Machiavellianism, Psychopathy, and Narcissism) have been mainly college students or older. In the present study, participants were 799 high school students, and the purpose was to identify the factor structure of the Dark Triad and examine differences according to sex, school year, and career direction. Additionally, we investigated the relationship between the Dark Triad and help-seeking attitudes. The results were in line with previous evidence, as the hierarchical factor structure of the Dark Triad was identified. Furthermore, negative influences of Machiavellianism and Psychopathy on help-seeking attitudes were found. On the other hand, there was a positive influence of Narcissism on help-seeking attitudes.

Keywords: dark triad, help-seeking, Machiavellianism, psychopathy, narcissism

Dark Triad とは Dark Triadとは、一般的に“望ましくない性格”とみなされるものの、精神医学的治療の対象とならない非臨床群においてもよく見られる性格特性である、マキャベリアニズム、サイコパシー、自己愛傾向の3つの総称である (Paulhus & Williams, 2002, Furnham, Richards, & Paulhus, 2013)。マキャベリアニズムは高い他者操作性および搾取性 (Christie & Geis, 1970)、サイコパシーは高い衝動性およびスリル希求性と、共感性および不安の欠如 (Hare, 1985; Lilienfeld & Andrews, 1996)、

そして自己愛傾向は高い誇大性、権利意識、支配性、優越性 (Raskin & Halls, 1979) といった特徴によって説明される。

このように、Dark Triadを構成する3つの性格特性は、それぞれが独立したものとして扱われてきた一方で、概念的には多くの類似した特徴を持ち、また尺度間の相関も高いことから、近年では包括的な概念としてとらえるようになってきている (Furnham et al., 2013)。たとえば、Jonason & Webster (2010) は12項目で簡便的にDark Triadを測定できる尺度

を開発したうえで、一般因子の他に3つのグループ因子によっても構成される階層的な因子構造を明らかにしている。また、日本においても田村他(2015)が、Jonason & Webster(2010)の尺度の邦訳版を作成して、同様の因子構造を確認している。しかし、従来のDark Triadに関する研究は大学生以上を対象とした研究が主流であり、それよりも若い年齢層を対象とした研究は一部のみみられるもの(たとえば、Lau & Marsee, 2012; Pabian, 2014; Stellwagen, 2012)、海外においてもいまだ数少ない。また、これらの研究では、Dark Triadが大学生以上のサンプルと同様の因子構造を示すのかについては、十分な検討がなされていない。Dark Triadがより若い年齢層においても同様の因子構造を持つことが確認できれば、発達的な変化についても比較検討しやすくなる。たとえば、Dark Triadは男性の方が女性よりも高いという性差が従来の研究では一貫して見られているが(Furnham et al., 2013; Jonason & Webster, 2010; Paulhus & Williams, 2002; 田村他, 2015)、そのような性差はどの発達段階において生じるものなのか、また、年齢あるいは学校種によって、その水準に違いが見られるのかなどについても、同じ尺度を用いて比較することが可能となる。

Dark Triadに関するこれまでの研究は、職場における不適切で非倫理的な行動、学校でのカンニングや剽窃、一般的な対人関係における衝動的な性行動や反社会的行動など、非適応的な行動との関連が主に扱われてきた(系統的なレビューはFurnham et al., 2013を参照のこと)。その一方で、サイコパシーは職業上の成功に結びつく場合があること(例えば、Dutton, 2012)など、Dark Triadの適応的な側面も注目されつつある。そこで本研究では、適応的な側面と非適応的な側面の両方を併せ持つ、援助要請に着目し、Dark Triadとの関連について検討する。

Dark Triadと援助要請との関連 援助要請は、“個人が問題の解決の必要性があり、もし他者が時間・労力・ある種の資源を費やしてくれるのなら、問題が軽減・解決するようなもので、その必要がある個人が他者に対して直接的に援助を要請する行動”との定義がある(DePaulo, 1983)。過度の援助要請は他者への依存を助長し非適応的な行動となりうるが、援助要請には依存的な側面だけでなく自律的な援助要請もあることが従来から指摘されており(Nelson-Le Gall,

Gumerman, & Scott-Jones, 1983; Nadler, 1998)、高校生における親・教師・友人に対する援助要請は、学校生活や日常生活において不適応が生じた場合、あるいはその可能性がある場合に、不適応からの回復および改善や予防に役立つ。援助要請は、言うまでもなく特定の他者すなわち援助者による援助を求める行為である。一方の援助行動は困難に陥っている他者に対して援助者自らの多少の犠牲を覚悟した上でその他者を助ける行動である。援助行動が自らの意志ではなく、他者の援助要請に応える援助である場合は、援助を求める他者に自己犠牲を求められているとも換言できよう。

阿部・太田(2014)は、中学生を対象として、教師から叱られることと援助要請の関連において、Dark Triadの一側面である自己愛傾向がどのような役割を果たしているかを検討している。その結果、自己愛傾向の高い生徒ほど、叱られることでその教師に対する否定的な援助要請態度が形成されやすいことが明らかとなった。ただし、この研究では自己愛傾向を叱りと援助要請との関連における調整変数としてとらえており、援助要請の規定因として位置づけているわけではない。また、自己愛傾向以外のDark Triadの各性格特性と、援助要請との関連はこれまでに検討されていない。

Dark Triadと援助要請の間にはどのような関連性が予測されるだろうか。Black, Woodworth & Porter(2014)は、Dark Triadが高い個人は、他者全般を自尊感情が低く、神経質で不安が高く、抑うつ的のみならず、“見下す”傾向を有していることを報告している。このように、他者を弱い存在と認識することとは、その他者に援助を求めることに対して否定的な態度を持ちやすいと考えられる。また、Dark Triadを構成する各性格特性が、個別の影響を援助要請に及ぼすことも考えられる。Jonason, Slomski, & Partyka(2012)は、Dark Triadの中でもサイコパシーが高い個人は、ビジネス場面における他者操作方略として、“脅し”などの強硬な方略をとりやすい一方で、自己愛傾向が高い個人は、“お世辞”などの穏当な方略をとりやすく、さらにマキャベリアニズムが高い個人は、強硬と穏当の両方の方略を用いることを明らかにしている。このような各性格特性の個別の影響が、援助要請との関連においてもみられるかもしれない。例えば、太田・阿部(2012)は、個人の援助要請態度には、問題解決だけでなく他者

を操作する意図を含む、関係志向的援助要請が所在することを指摘しており、これは Dark Triad の中でも、マキャベリアニズムと深くかかわると考えられる。

本研究の目的 以上より、本研究の目的は、高校生を対象に調査を実施し、Dark Triad の因子構造を確認するとともに、性別、学年、進路希望による差についても検討し、大学生以上を対象に行われた従来の研究の知見との比較を行うことである。あわせて、援助要請との関連性を検討し、Dark Triad 全体および、それを構成する各性格特性からの影響を明らかにする。

方 法

調査方法および調査対象者 2015年12月に、三重県中央部の公立高校の全学年を対象に調査を実施し、799名（1年生男75名、女123名、2年生男101名、女194名、3年生男103名、女203名）の回答を得た。なお、本調査は当該学校の学校長の許可のもとに実施された。

質問項目 個人属性：性別、学年の他に、卒業後の進路希望について回答を求めた。進路の選択肢は“就職（ $n = 243$ ）”“大学（ $n = 155$ ）”“短大・専門学校（ $n = 305$ ）”“未定（ $n = 81$ ）”“その他（ $n = 7$ ）”であった。Dark Triad: 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J; 田村他, 2015) を使用した。この尺度は Dark Triad の各性格特性に対応する4項目、計12項目で構成され、選択肢は“1.あてはまらない”から“5.あてはまる”までの5件法である。援助要請態度：太田・阿部（2012）の尺度をもとに、調査対象校の校長・教頭・教育相談・生徒指導・各学年主任を含む12名の教員により生徒の実態を反映した項目を選定し、表現についても修正した13項目を使用した。選択肢は“1.あてはまらない”から“5.あてはまる”までの5件法である。

結 果

因子構造の確認 田村他（2015）と同様に、Dark Triad の1因子モデル、3因子モデル、階層因子モデル（Figure 1）を検討するため、確認的因子分析を行った。なお、事前に探索的因子分析を行ったところ、マキャベリアニズムとサイコパシーの項目が1

つの因子にまとまったことから、この2つを統合した因子と自己愛傾向因子による、2因子モデルの適合度についても補足的に検討した（Table 1）。

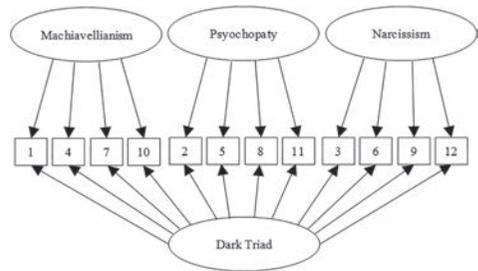


Figure 1 Dark Triad の階層因子分析モデル

Table 1 各因子モデルの適合度

	χ^2	df	p	CFI	RMSEA	AIC
1因子	897.659	54	<.001	.791	.142	945.659
2因子	347.509	53	<.001	.927	.085	397.509
3因子	270.590	51	<.001	.946	.075	324.590
階層因子	191.917	42	<.001	.963	.068	263.917

その結果、1因子モデルはCFIが.90未満、RMSEAは.10を超えており、データに対するモデルの適合は悪かった。それ以外のモデルはCFI、RMSEAいずれもほぼ同程度に良好であるが（CFI > .90, RMSEA < .10）、AICの比較では、2因子モデル（AIC = 397.509）と比べて3因子モデル（AIC = 324.590）の方が低く、さらに、階層因子モデル（AIC = 324.590）が最も低い、すなわちデータ対して最もよく適合していることが明らかとなった。これは田村他（2015）の知見とも整合しており、Dark Triad は3つのグループ因子で構成されると同時に、1つの一般因子としても説明されるという、階層的な構造が本研究においても確認された。したがって、以降の分析では、3因子構造に基づく尺度得点（マキャベリアニズム、サイコパシー、自己愛傾向それぞれの $\alpha = .84, .73, .85$ ）と、それを合算したDark Triad 総合得点（以降、DT 総合得点、 $\alpha = .89$ ）の両方を使用した。

援助要請態度については、太田・阿部（2012）では4因子構造が確認されているが、前述のとおり、教育現場での調査実施にあたり質問項目の修正、加筆、削除が行われたため、改めて探索的因子分析を行った。その結果、因子負荷量、及び解釈可能性から3因子を抽出した（Table 2）。第1因子には、“人

Table 2 援助要請態度の因子分析結果

項目	Factor 1	Factor 2	Factor 3
人に援助を求めても、自分が必要な援助をしてもらえない	.85	-.03	-.01
人に助けを求めても、助けが必要な時に助けてもらえない	.81	-.13	.06
人に援助を求めることは、恥だ	.56	.03	-.08
人に援助を求めることは、自分が弱者であることを認めることだ	.55	.05	.06
人に助けを求めると、自分が求めていることまで世話をやかれる	.41	.19	.10
相手との関係性について知るためにふだんの何気ない時でも援助を求める	.05	.78	-.07
自分でできることでも相手との親密感を図るために援助を求める	.13	.73	-.12
少し自分でやってみて上手くいかないときは、あまり悩まず助けを求める	-.19	.49	.10
解らないことがあったときは、自分でやるより、その理由や考え方より、答えを教えてもらう	.04	.35	.09
相手を尊重する気持ちや、励ましのために助けを求める	.01	.35	.29
問題点と自分のこれまでの解決への取り組みをきちんと話して援助を求める	.07	.04	.63
自分で、できる限りやってみて、それでもダメなときは、助けを求める	-.11	.04	.63
人に助けを求めるときは、次からは同じことで助けを求めなくてもいいように考え方や方法をしっかり聞く	.13	-.04	.34
因子寄与	2.64	2.35	1.23
因子間相関			
Factor 1 : 援助要請忌避	1.00		
Factor 2 : 関係志向的援助要請	.46	1.00	
Factor 3 : 自律的援助要請	-.10	.27	1.00

に援助を求めても、自分が必要な援助をしてもらえない”“人に援助を求めても、必要な時に助けてもらえない”などの項目が含まれることから、援助要請忌避と命名した。第2因子には、“相手との関係性について知るためにふだんの何気ない時でも援助を求める”“自分でできることでも相手との親密感を図るために援助を求める”などの項目が含まれることから、関係志向的援助要請と命名した。第3因子には、“問題点と自分のこれまでの解決への取り組みをきちんと話して援助を求める”“自分で、できる限りやってみて、それでもダメなときは、助けを求める”などの項目が含まれることから、自律的援助要請と命名した。この結果をもとに尺度得点を算出し、以下の分析に用いた（援助要請忌避、関係志向的援助要請、自律的援助要請それぞれの $\alpha = .78, .69, .54$ ）。なお、第2因子、第3因子については負荷量の低い項目もみられたが、これらの項目を削除すると α 係数がさらに低くなることや、因子に含まれる項目数が著しく少なくなってしまうことから、削除せずにそのまま合成して得点化した。

性別・学年・進路希望による Dark Triad および援助要請態度の差異 性別、学年、進路希望（“未定”“その他”は人数が少ないため分析から除外）を独立変数、Dark Triad を従属変数とした、三要因分散分

析を行った。その結果、マキャベリアニズム、サイコパシー、自己愛傾向、DT 総合得点のいずれに対しても性別の主効果（順に、 $F(1, 677) = 15.14, p < .001, \eta^2_p = .02$; $F(1, 674) = 7.49, p < .01, \eta^2_p = .01$; $F(1, 672) = 5.64, p < .05, \eta^2_p = .01$; $F(1, 667) = 12.35, p < .001, \eta^2_p = .02$ ）と、進路の主効果（順に、 $F(2, 677) = 3.15, p < .05, \eta^2_p = .01$; $F(2, 674) = 3.45, p < .05, \eta^2_p = .01$; $F(2, 672) = 3.67, p < .05, \eta^2_p = .01$; $F(1, 667) = 4.32, p < .05, \eta^2_p = .01$ ）がみられた。性別については、男子の方が女子よりも全ての得点が有意に高かった。また、進路については多重比較の結果、大学進学希望者が就職希望者よりも、全ての得点が有意に高かった（ $ps < .05$ ）。短大・専門学校希望者との2群との有意差はみられなかった。学年の主効果、および全ての交互作用は有意ではなかった。

次に、援助要請態度の下位尺度得点を従属変数とした同じく三要因分散分析を行った。その結果、援助要請忌避、および関係志向的援助要請には性別の主効果（順に、 $F(1, 666) = 5.91, p < .05, \eta^2_p = .01$; $F(1, 668) = 6.21, p < .05, \eta^2_p = .01$ ）と、学年の主効果（順に、 $F(2, 666) = 3.72, p < .05, \eta^2_p = .01$; $F(1, 668) = 3.72, p < .05, \eta^2_p = .01$ ）がみられた。性別については、援助要請忌避、関係志向的援助要請のいずれにおいても、男子の方が女子よりも有意

に高かった。学年については多重比較の結果、援助要請忌避は1年生に比べて2年生および3年生の方が高く(いずれも $p < .05$)、関係志向的援助要請は1年生に比べて3年生が高かった($p < .05$)。進路の主効果、および全ての交互作用は有意ではなかった。また、自律的援助要請に対しては、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった。

Table 3に、性別、学年別、進路希望別の Dark Triad および援助要請態度の平均値、標準偏差を示す。なお、Dark Triad 得点の水準については、大学

生を対象とした田村他(2015)との比較も行った。本研究と同様に得点化した場合、田村他(2015)では、それぞれマキャベリアニズムが $M = 2.67$ ($SD = 0.89$)、サイコパシーが $M = 2.54$ ($SD = 0.71$)、自己愛傾向が $M = 3.33$ ($SD = 0.88$)、DT総合得点が $M = 8.55$ ($SD = 1.91$)であるが、本研究の結果は、それと比べていずれも有意に低かった(順に、 $t(1043) = 7.37, p < .001, d = .53; t(1043) = 3.52, p < .001, d = .27; t(1043) = 13.47, p < .001, d = .98; t(1043) = 10.23, p < .001, d = .75$)。

Table 3 性別、学年別、進路希望別の Dark Triad および援助要請態度の平均値(標準偏差)

	性別			学年			進路希望		
	全体	男	女	1年	2年	3年	就職	大学	短・専
マキャベリアニズム	2.21 (0.86)	2.41 (0.88)	2.09 (0.83)	2.13 (0.86)	2.24 (0.85)	2.22 (0.87)	2.17 (0.80)	2.41 (0.93)	2.13 (0.86)
サイコパシー	2.33 (0.80)	2.47 (0.88)	2.25 (0.74)	2.26 (0.82)	2.39 (0.79)	2.32 (0.79)	2.26 (0.74)	2.52 (0.91)	2.28 (0.77)
自己愛傾向	2.42 (0.94)	2.60 (1.00)	2.31 (0.91)	2.37 (0.94)	2.45 (0.95)	2.41 (0.97)	2.35 (0.89)	2.65 (1.01)	2.34 (0.95)
DT総合	6.97 (2.18)	7.48 (2.19)	6.65 (2.14)	6.77 (2.06)	7.07 (2.19)	6.95 (2.27)	6.79 (1.98)	7.57 (2.36)	6.76 (2.22)
援助要請忌避	2.35 (0.78)	2.45 (0.86)	2.27 (0.74)	2.14 (0.71)	2.39 (0.79)	2.39 (0.81)	2.30 (0.77)	2.47 (0.82)	2.29 (0.77)
関係志向的援助要請	2.87 (0.70)	2.94 (0.76)	2.84 (0.67)	2.73 (0.63)	2.89 (0.69)	2.95 (0.75)	2.89 (0.68)	2.81 (0.79)	2.89 (0.68)
自律的援助要請	3.54 (0.70)	3.55 (0.72)	3.56 (0.68)	3.54 (0.71)	3.53 (0.71)	3.58 (0.67)	3.55 (0.68)	3.55 (0.79)	3.56 (0.66)

Dark Triad と援助要請態度との関連 次に、Dark Triad と援助要請態度との関連について検討した。前述の分散分析において援助要請態度には性別、学年の主効果がみられたため、これらを Step 1 で統制変数として投入し、Dark Triad を Step 2 で投入する階層的重回帰分析を行った。結果を Table 4 に示す。なお、Dark Triad は各性格特性を投入した場合(Step 2-1)と、DT 総合得点(Step 2-2)を投入した場合の結果を示す。

援助要請態度のいずれの下位尺度に対しても、統制変数のみの Step 1 に比べて、Dark Triad を加えた Step 2-1 および Step 2-2 は決定係数の有意な増分が認められた。

まず Dark Triad の各性格特性を投入した場合(Step 2-1)、援助要請忌避に対しては、マキャベリアニズムとサイコパシーが有意な正の影響を及ぼしていた。関係志向的援助要請に対しては、マキャベリアニズムと自己愛傾向が有意な正の影響を及ぼしていた。さらに、自律的援助要請に対しては、自己

Table 4 援助要請態度を目的変数とした階層的重回帰分析の結果

	援助要請忌避	関係志向的援助要請	自律的援助要請
Step 1			
性別	-.15**	-.10+	.00
学年	.10**	.11**	.03
R^2	.02**	.02**	.00
Step 2-1			
性別	-.05	-.04	-.02
学年	.09**	.10**	.03
マキャベリアニズム	.11*	.09*	-.07
サイコパシー	.33**	-.06	-.12**
自己愛傾向	.01	.18**	.11**
R^2	.20**	.10**	.03**
ΔR^2	.18**	.08**	.03**
Step 2-2			
性別	-.05	-.04	-.01
学年	.09**	.10**	.03
DT総合	.14**	.07**	-.02*
R^2	.16**	.07**	.01
ΔR^2	.15**	.05**	.01*

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

愛傾向が正の影響を、サイコパシーが負の影響を及ぼしていた。なお、援助要請忌避、関係志向的援助要請において、Step 1では有意であった性別の影響が、Step 2では非有意になることから、これら援助要請の性差はDark Triadの性差によって説明されることが明らかとなった。

次に、DT総合得点を投入した場合(Step 2-2)、援助要請忌避と関係志向的援助要請に対しては有意な正の影響が、自律的援助要請に対しては有意な負の影響がみられたが、Dark Triadの各性格特性を投入した場合に比べて、いずれも決定係数は低かった。

考 察

本研究の結果、従来の研究と同様に、Dark Triadの階層的な構造が確認された。すなわち、高校生においても、Dark Triadの3つの性格特性は別個のものとして、かつ統合可能なものとしてみなすことができるといえる。

また、全般的に男子の方が女子よりもDark Triadが高いことが明らかとなり、これも田村他(2015)をはじめとした従来の知見と一致する。さらに、大学生に比べて全般的に水準は低かったが、学年による差異はみられず、進路希望による差異がみられ、大学進学希望者が就職希望者よりもDark Triadが高いことが明らかとなった。したがって、高校生と大学生の差は単なる加齢によって徐々に上昇したものというより、むしろ学校種の影響が強いのかかもしれない。大学進学希望者のDark Triadが高いという結果については、これまでの研究において、Dark Triadは社会支配志向との関連(Hodson, Hogg, & MacInnis, 2009)、冷酷な自己進歩志向との関連(Zuroff, Fournier, Patall, & Leybman, 2010)、権力や達成への価値づけ(Kajonius, Persson, & Jonason, 2015)が示されており、こうした意識が、より高い学歴を目指そうとする進路希望と結びついており、高校生と大学生の水準の差として現れる、と考えられる。

次に、援助要請態度との関連について考察する。Dark Triadは総合的には援助要請忌避態度との関連が最も強く、関係志向的援助要請態度や自律志向的援助要請とは有意ではあるものの、強い関連性は認められなかった。しかしながら、各性格特性との関連を検討した場合は、援助要請態度に対して独自の影響力をもつことも示された。

マキャベリアニズムは、他者に援助を求めること

を避ける構えである援助要請忌避態度と、他者との心理的距離を付度しつつ関係性を構築するための援助要請である関係志向的援助要請態度が高い傾向がみられた。すなわち、他者操作的で搾取的な特性とされるマキャベリアニズムは、援助要請を自己の目的達成の手段として用いているとも考えられる。

サイコパシー傾向は、自律的援助要請態度が低く、援助要請忌避態度は高い傾向がみられた。自律的援助要請態度は、可能な限り個人で解決を試みた末に援助を求め、今後の問題の予防や解決に役立てようとするものである。衝動的な側面や共感性の欠如によって特徴づけられるサイコパシーは、長期的な視点や互恵的な対人関係を築き難いことが示唆されているといえよう。

自己愛傾向は、自律的援助要請態度と関係志向的援助要請態度に対して正の影響を示した。自己愛傾向の高い個人は、賞賛や注目、地位や名声を求める傾向があるため、他のDark Triadの特性とは異なり、社会的評価を得られる対人行動を指向していることが示唆されているといえよう。実際に、自己愛傾向が高い個人は、マキャベリアニズムやサイコパシーが高い個人と比較すると、どちらかといえば望ましく評価されやすいことも明らかとなっている(Rauthman & Kolar, 2012)。

援助要請との関連の検討においては、Dark Triadの各性格特性を投入した場合の方が、DT総合得点を投入した場合よりも説明力が高かった。Jonason, Kavanagh, Webster, & Fitzgerald (2011)によれば、配偶者保持や他者操作といった個人特性は、Dark Triadの各性格特性からの影響による説明が最も適合度が高く、ソシオセクシャリティ(Sociosexuality)のような、それよりも包括的で高次のレベルの概念に対しては、Dark Triadの総合得点による説明が最も適合することが明らかとなっている。援助要請態度は配偶者保持や他者操作と同程度のレベルの概念に相当すると考えられることから、この点においても本研究の結果は、従来の知見と整合しているといえる。

以上より、Dark Triadの高い生徒は援助要請を避けることが明らかとなり、特にそれはサイコパシーが高い生徒に顕著であった。また、サイコパシーが高い生徒は自律的な援助要請を行いにくいことも示された。このような生徒に対してどのようなサポートが可能なのかについては、今後検討すべき課題で

ある。また、マキャベリアニズムや自己愛傾向が高い生徒は他者を操作したり、承認を求めたりする意図で援助要請をする可能性もあり、こうした援助要請には注意が必要なのかもしれない。

今後の課題としては、本研究ではひとつの高校のみを対象としているが、より一般化できるサンプルでも同様の結果が得られるか、確認が必要である。また、今回使用した Dark Triad の尺度は項目数が少なく簡便に実施できるものであるが、各性格特性の下位因子を測定できる尺度を使用することで、より詳しい理解ができるだろう。たとえば自己愛傾向は誇大性と脆弱性 (Ackerman et al., 2011; Pincus et al., 2009)、サイコパシーは一次的と二次的 (Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick, 1995) という下位分類がなされる場合があり、これらは援助要請態度に対して異なる働きをする可能性がある。

また、誰に援助要請するのか、その相手との関係によっても結果は異なると考えられる。援助要請態度尺度の信頼性の改善も含めて、今後は質問の仕方を工夫して詳細に検討する必要もある。さらには、適応的あるいは非適応的な援助要請という観点では、Dark Triad が高い個人の援助要請を相手はどのようにとらえているのか、他者評価も加えることで、援助要請の肯定的・否定的な影響についても、より明確に示すことができるだろう。

引用文献

- 阿部晋吾・太田仁 (2014). 中学生の叱られ経験後の援助要請態度—自己愛傾向による差異— 教育心理学研究, 教育心理学研究, 62, 294-304.
- Ackerman, R.A., Witt, E.A., Donnellan, M.B., Trzesniewski, K., Robins, R.W., & Kashy, D.A. (2011). What does the narcissistic personality inventory really measure? *Assessment*, 18, 67-87.
- Black P.J., Woodworth M., Porter S. (2014). The Big Bad Wolf? The relation between the Dark Triad and the interpersonal assessment of vulnerability. *Personality and Individual Differences*, 67, 52-56.
- Christie, R., & Geis, F.L. (1970). *Studies in Machiavellianism*. New York: Academic Press.
- DePaulo, B.M. (1983). Perspectives on help-seeking. In B.M. DePaulo, A. Nadler, & J.D. Fisher (Eds.), *New directions in helping (Vol.2): Help-seeking*. New York: Academic Press.
- Dutton, K. (2012). *The wisdom of psychopaths*. New York: Scientific American/Farrar, Straus and Giroux.
- 田村紋女・小塩真司・田中圭介・増井啓太・ジョナソンピーターカール (2015). 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen. (DTDD-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 24, 26-37.
- Hare, R.D. (1985). Comparison of procedures for the assessment of psychopathy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 7-16.
- Hodson, G., Hogg, S.M., & MacInnis, C.C. (2009). The role of “dark personalities” (narcissism, Machiavellianism, psychopathy), Big Five personality factors, and ideology in explaining prejudice. *Journal of Research in Personality*, 43, 686-690.
- Jonason, P.K., & Webster, G.D. (2010). The Dirty Dozen: A concise measure of the Dark Triad. *Psychological Assessment*, 22, 420-432.
- Jonason, P.K., Kavanagh, P.S., Webster, G.D., & Fitzgerald, D. (2011). Comparing the measured and latent Dark Triad: Are three measures better than one? *Journal of Methods and Measurement in the Social Sciences*, 2, 28-44.
- Jonason, P.K., Slomski, S., & Partyka, J. (2012). The Dark Triad at work: How toxic employees get their way. *Personality and Individual Differences*, 52, 449-453.
- Kajonius, P.J., Persson, B., & Jonasson, P.K. (2015). Achievement, power, and hedonism: Universal values that characterize the Dark Triad. *Personality and Individual Differences*, 77, 173-178.
- Lau, K.S.L., & Marsee, M.A. (2012). Exploring narcissism, psychopathy, and Machiavellianism in youth. Examination of associations with antisocial behavior and aggression. *Journal of Child and Family Studies*, 22, 355-367.
- Levenson, M.R., Kiehl, K.A., & Fitzpatrick, C.M. (1995). Assessing psychopathic attributes in a noninstitutionalized population. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 151-158.
- Lilienfeld, S.O., & Andrews, B.P. (1996). Development and preliminary validation of a self-report measure of psychopathic personality traits in noncriminal populations. *Journal of Personality Assessment*, 66, 488-524.
- Nadler, A. (1998). Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and dependent help seeking. In S.A. Karabenick (Ed). *Strategic help seeking: Implications for learning and teaching*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates

Publishers, pp.61-93.

- Nelson-Le Gall, S., Gumerman, R., & Scott-Jones, D. (1983). Instrumental help-seeking and everyday problem-solving: A developmental perspective. In B.M. DePaulo, A. Nadler, & J.D. Fisher (Eds.), *New directions in helping: Help seeking*. Vol.2. New York: Academic Press. pp.265-283.
- 太田仁・阿部晋吾 (2012). 援助要請態度と援助者の探索過程—援助要請態度における関係志向性—日本心理学会第76回大会発表論文集
- Pabian, S., De Backer, C.J.S., & Vandebosch, H. (2015). Dark Triad personality traits and adolescent cyber-aggression. *Personality and Individual Differences*, 75, 41-46.
- Paulhus, D.L., & Williams, K.M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, 36, 556-563.
- Pincus, A. L., Ansell, E.B., Pimentel, C.A., Cain, N.M., Wright, A.G.C., & Levy, K.N. (2009). Initial construction and validation of the Pathological Narcissism Inventory. *Psychological Assessment*, 21, 365-379.
- Raskin, R., & Hall, C.S. (1979). A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Rauthmann, J.F., & Kolar, G.P. (2012). How “dark” are the Dark Triad traits? Examining the perceived darkness of narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Personality and Individual Differences*, 53, 884-889.
- Stellwagen, K.K., & Kerig, P.K. (2013). Dark triad personality traits and theory of mind among school-age children. *Personality and Individual Differences*, 54, 123-127.
- Zuroff, D.C., Fournier, M.A., Patall, E.A., & Leybman, M.J. (2010). Steps toward an evolutionary personality psychology: Individual differences in the social rank domain. *Canadian Psychology*, 51, 58-66.

付記

本論文は、以下の抄録原稿に、同一著者らが大幅な加筆・修正を加えて再構成したものである。阿部晋吾・太田仁・福井齊 (2016). 高校生の Dark Triad (1) — 因子構造と性別・学年・進路希望による差異—日本教育心理学会第58回大会発表論文集。太田仁・阿部晋吾・福井齊 (2016). 高校生の Dark Triad (2) — 高校生の DT と援助要請との関連— 日本教育心理学会第58回大会発表論文集。福井齊・太田仁・阿部晋吾 (2016). 高校生の Dark Triad (3) — 高校生の DT と抑うつとの関連性— 日本

教育心理学会第58回大会発表論文集。

利益相反

著者全員がいかなる利益相反もないことを表明する。

著者分担

第1著者が本研究を提案し、データ分析を行い、草稿をまとめた。第2著者は使用する尺度と分析計画に助言を行い、調査を実施し、草稿の修正を行った。第3著者は研究デザインと分析計画に助言を行い、草稿の修正を行った。最終稿は三人で確認した。

著者紹介

阿部晋吾 関西大学社会学部教授。2005年関西大学大学院社会学研究科修了，博士（社会学）。梅花女子大学講師，准教授，教授を経て，2019年より現職。専門は社会心理学で，怒りや叱りが人間関係に及ぼす影響に関する研究を主に行う。著書に『自己愛の心理学：概念・測定・パーソナリティ・対人関係』（分担執筆，金子書房），『怒りの心理学』（分担執筆，有斐閣）など。

太田仁 奈良大学社会学部教授。2002年関西大学大学院社会学研究科修了，博士（社会学）。梅花女子大学教授を経て，2019年より現職。専門は社会心理学で，教育場における援助要請態度の構造と態度の形成要因に関する研究を主に行う。著書に『家族をつなぐカウンセリング』（金子書房），『援助要請の心理学』（金子書房）など。

福井齊 梅花女子大学心理こども学部准教授。2011年関西大学大学院社会学研究科修了，博士（社会学）。梅花女子大学講師を経て，2017年より現職。専門は社会心理学で，自尊感情の形成要因や基盤の発達の变化に関する研究を主に行う。著書に『青年心理学』（分担執筆，ブレーン出版），『こどもの自信白書』（分担執筆，イロドリ出版）など。

Correspondence concerning to this article should be addressed to Prof. Shingo Abe at s-abe@kansai-u.ac.jp.

要旨

Dark Triad とは、マキャベリアニズム、サイコパシー、自己愛傾向の3つの総称である。これまでの Dark Triad に関する研究は、大学生以上を対象とした研究が主流である。本研究では、799名の高校生を対象に調査を実施し、Dark Triad の因子構造を確認するとともに、性別、学年、進路による差についても検討し、大学生以上を対象に行われた従来の研究の知見との比較を行うことを目的とした。また、合わせて援助要請との関連についても検討した。その結果、Dark Triad においては階層的な因子構造が高校生サンプルにおいても確認された。また、

マキャベリアニズム、サイコパシーは援助要請に対してネガティブな関連がみられるのに対して、ナルシシズムはポジティブな関連がみられた。

キーワード：ダークトライアド (Dark Triad)、援助要請、マキャベリアニズム、サイコパシー、自己愛傾向